『新・やまと物語』（第４巻）

タイトル

第１１章　仲哀天皇
第１２章　神功皇后（息長足姫尊）
第１３章　三国鼎立
第１４章　洛陽の変遷の歴史
第１５章　衛氏朝鮮以後の朝鮮半島の歴史
第１６章　景初三年春
第１７章　魏国への旅立ち
第１８章　洛陽の都
第１９章　帰途
第２０章　単位

新・やまと物語（4）

古閑炯作（こがけいさく）

画像提供：東海大学情報技術センター

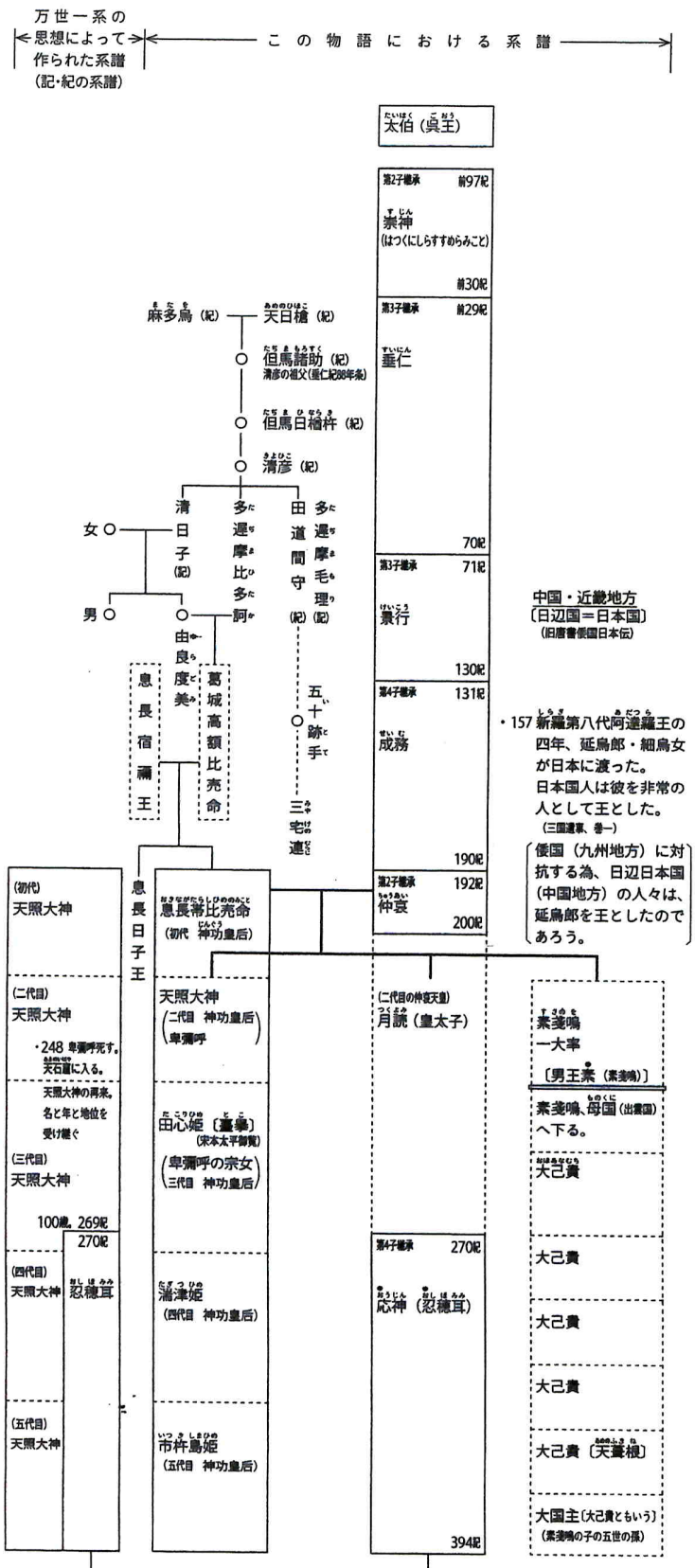
『新・やきと物語』から転写して下さい。
＊海の色が濃すぎる。少し薄くして下さい。

画像提供：東海大学情報技術センター

（拡大映像）

〔第１表〕系譜

A3に印刷



中国・近畿地方
〔日辺国＝日本国〕
（旧唐書倭国日本伝）

・157 新羅第八代阿達羅王の四年、延烏郎・細烏女が日本に渡った。
日本国人は彼を非常の人として王とした。
（三国遺事、巻一）

〔倭国（九州地方）に対抗する為、日辺日本国（中国地方）の人々は、延烏郎を王としたのであろう。〕

瓊瓊杵命が磐長姫をしりぞけたので、これより以後、天皇命等の命が短くなった」（記）
つまり、長男（長女）が襲名している限り、同一名を名乗るという古来の風習は、瓊瓊杵命（仁徳天皇）の時に廃止され、これに替わって、大陸の王位継承法が採用されることになったのであろうか。
これより後、王位は、複雑に継承されてゆくことになる。

・殷末　周の太伯は、弟季歴に位を譲る為、江南にはしり、文身断髪して君長となり、呉国を建国した。
〔「倭人は自ら太伯の後と云う」と、魏略逸文・晋書・梁書に記されている。〕

・（？）　前漢の武帝（在位前141～前87年）、閩越王を滅ぼす。（史記・漢書）
＊閩越王は、実は、太伯の末裔だったのではなかろうか。

・（前104頃）　太伯の後、閩越寧還をあきらめ、会稽の東冶あたりから九州へ東遷開始か。

・前97　崇神天皇即位。冀子達の百余国（後代の倭国）中の極南界の地に倭奴国を建国して王となったか。
〔倭奴国は、後漢末（220）の版図でいえば、倭国（北九州・山口地方）の極南界に位置していたのであろう。（後漢書倭伝）〕

・（垂仁28）　垂仁天皇の同母弟「倭彦」が薨じた時、殉死が始まった。（崇神記・垂仁紀）

・57　極南界の倭奴国が奉貢朝賀した。（後漢書倭伝）

・61　由道間守を常世国（元の閩越のことであろうか）へ遣わす。

・71　橘を持ち帰った由道間守、殉死する。（記・紀）

・107　倭国王帥升は、生口百六十人を献じ、請見を願った。（後漢書倭伝）

・147　桓・霊の間、倭国大乱。（後漢書倭伝）
〔倭国と冀子国との戦いであったろうか〕
倭国が冀子国を奪い取り、北九州・山口地方に三十余国を置いて統治することとなったように思われる。

・188
＊北九州・山口地方の小銅鐸終焉。

・200　神功皇后、朝鮮半島南端の狗邪韓国を領有。

・（？）　南の奴国のことを「邪馬台国」（八女土国）と呼称するようになったか。

・（？）　共立（男弟が卑彌呼をたすけて国を治めた）

・239　倭の女王卑彌呼、難升米らを遣わし、魏帝に朝献。（魏志倭人伝）

・247　倭の女王卑彌呼、狗奴国・男王卑彌弓呼素と不和。（魏志倭人伝）

・（248？）　卑彌呼死す。男王（素戔嗚）立つ。
国中服さず、当時、千余人を殺す。

・（？）　卑彌呼の宗女臺拳（田心姫か）年13を王となす。

・（？）　素戔嗚、出雲国（今の近畿地方）へ下る。
＊「宇宙に君臨たるべからず」と申し渡された素戔嗚は、中国山脈の山奥伝いに下っていったのだろう。（「紀」三貴子誕生条。他参照）

・266　神功皇后、晋の武帝泰初二年に貢献。（紀）

・313　晋の力が弱まった。高句麗は楽浪郡（平壌あたり）を併合。

・314　高句麗は、引き続いて帯方郡を亡ぼす。
＊この頃、高句麗は、馬韓（百済）・辰韓（新羅）を属国としたのであろう。
＊この当時、馬韓から百済へ、辰韓から新羅へと国名が変わったようである。

・331（辛卯）　倭は辛卯の年に来って海を渡り百残（百済）・□□・新羅を破って臣民とした。
（広開土王陵碑・神功皇后の三韓征討）

・（372？）　百済、七枝刀を倭国に献上。（干支2運繰り下げ）
＊七枝刀に泰和四年（369）の銘有り。

・（？）　天叢雲剣を献上。阿蘇の火を三輪山に移す。

・（？）　中つ国（東の狗奴国）を平定。銅鐸終焉。

・（？）　出雲国（近畿地方）の国譲り。
＊大国主、今の出雲に新しい出雲国をつくる。

・（？）　応神天皇、難波に大隈宮を造営。

・391　広開土王即位。

・396　広開土王、躬（みずから）水軍を率いて百済を討ち、多くの城を落す。（広開土王陵碑）
〔応神天皇の崩御の機をつかんで、高句麗は百済へ攻め入ったのであろうか。〕

・400　高句麗が倭軍を任那加羅まで追撃。（広開土王陵碑）

・404　倭軍は、帯方の地にまで侵入して高句麗と戦ったが、大敗。（広開土王陵碑）

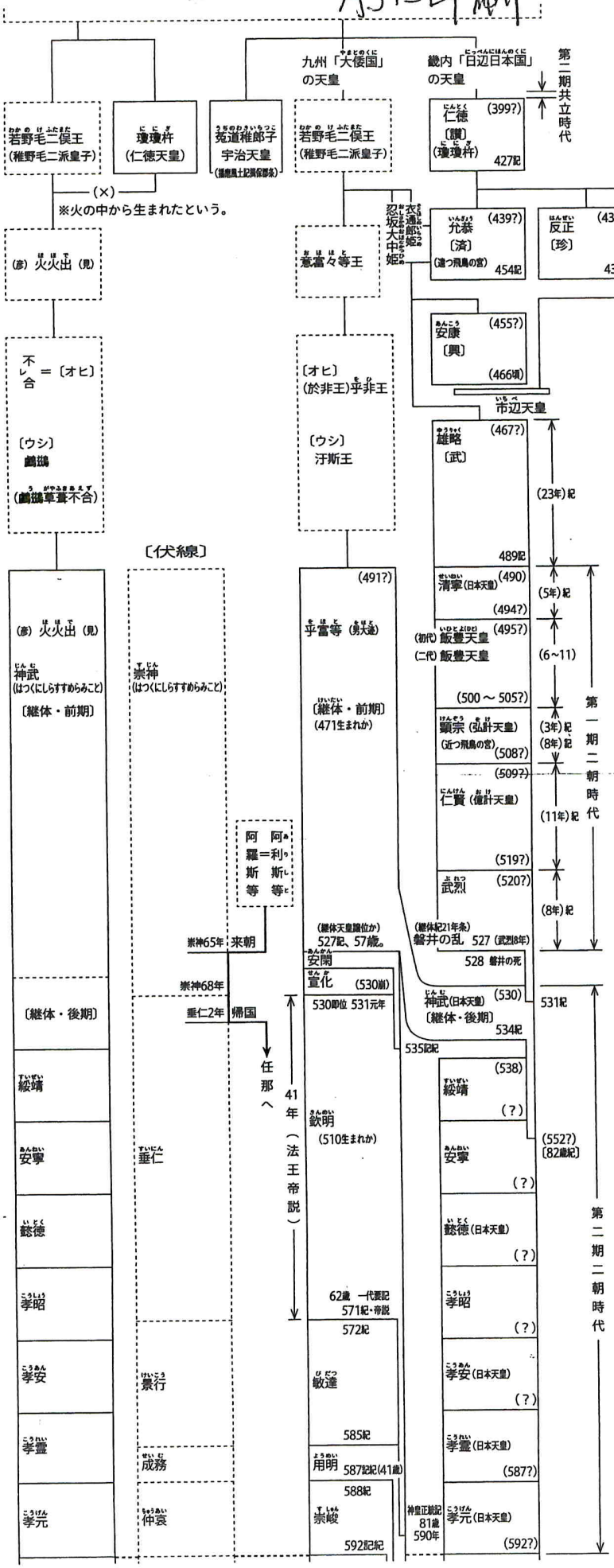
・407　京畿道北部で、再度大敗。（広開土王陵碑）

『新やまと物語』第一巻第一章から転写して下さい。決して新しく作らないで下さい。チェックが大変だからです。

必ず、切断の為の線を入力して下さい。

4

A3に印刷



- 413　倭王、東晋に入朝。（晋書安帝紀）
- 420　東晋亡び、宋起こる。
- 421　倭王讃、宋に入朝。（宋書倭国伝）
（仁徳天皇・オホサザキの「サザ」をとって讃の字を当てたといわれている）
- 425　同上
- 430　倭国王、宋に入朝。（宋書倭国伝）
（履中天皇・イサホワケの「サ」をとって讃の字を当てたといわれている）

※　仁徳天皇も履中天皇も、共に、「讃」という名で朝貢したのであろう。

- （433?）讃（履中）が死んで、弟珍（反正）立つ。
- （?）　倭国王珍（反正）、宋に入朝。（宋書倭国伝）
- 438　倭国王珍（反正）、宋に入朝。（宋書文帝紀）
（入朝が反正天皇崩御後になったか）
- 443　倭国王済（允恭）、宋に入朝。（宋書倭国伝）
- 451　倭国王済（允恭）、宋に入朝。（宋書文帝紀）
- （?）　済（允恭）死す。世子興（安康）、使いを遣わして貢献。（宋書倭国伝）
- 460　倭国使を遣わして貢献。（宋書孝武帝紀）
- 462　倭王世子興（安康）を安東将軍・倭国王とする。（宋書倭国伝）
- （?）　興（安康）死んで、弟武（雄略）立つ。
（宋書倭国伝）
- （489記）雄略天皇紀の遺詔は隋書・高祖紀の文章を点綴したものというが、この両書ともに、「天下を共治すること」を望んでいる。
（ここに、二朝時代が出現したと考えたい）
- （?）　扶桑略記は「飯豊天皇、廿四代女帝」とし、皇胤紹運録は「飯豊天皇、忍海辺女王是也」といい、両書とも天皇とする。
- 503（癸未の年）　隅田八幡画像鏡を、次のように解したい。
「白十大王」（飯豊大王）の癸未の年八月、男弟王（太子億計王）が意柴沙加宮（忍坂宮）に在す時……斯麻（百済第25代武寧王、在位501～523年）が開中費直・今州利二人等を遣わして、この鏡を作る」

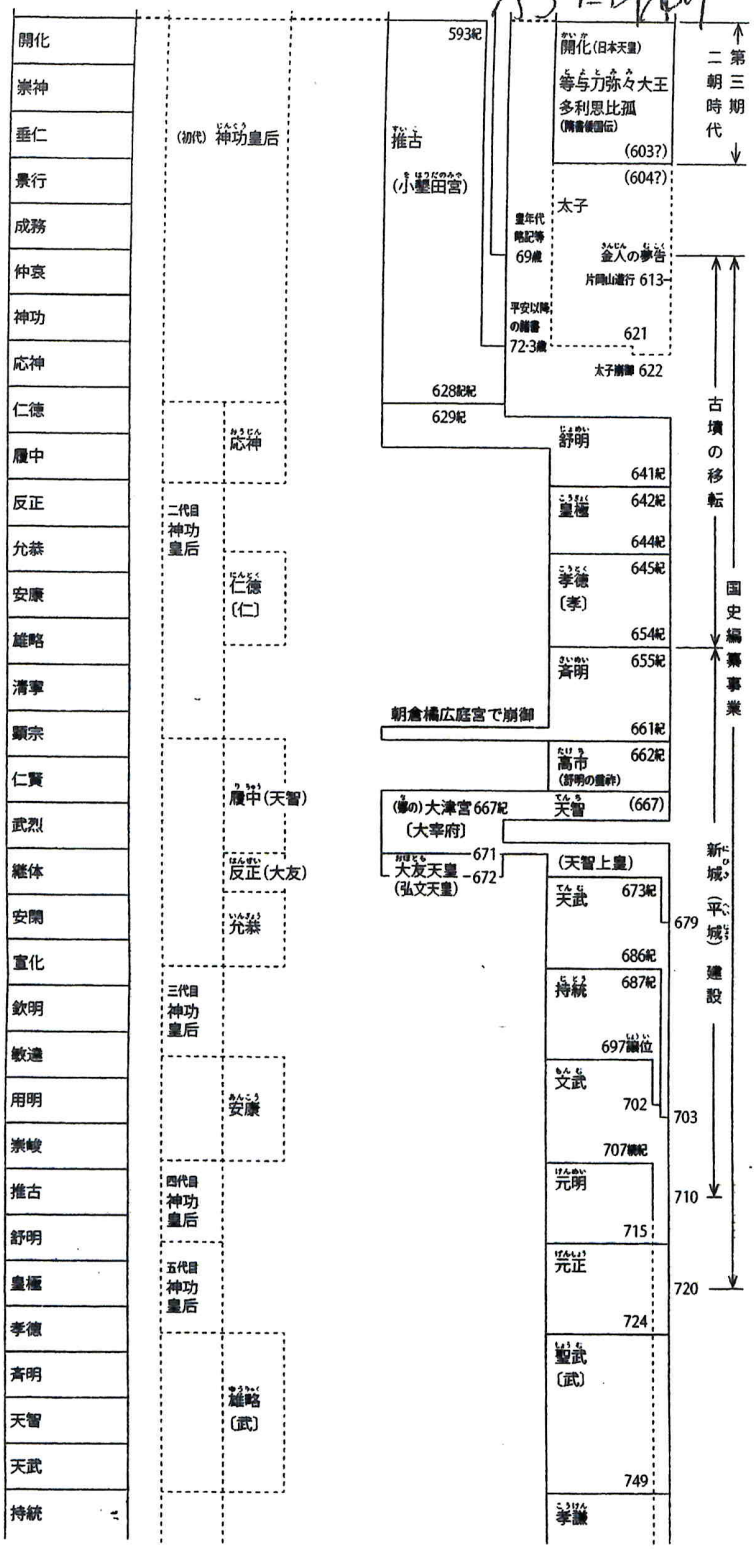
＊男弟王とあるのだから、日十大王は女性（姉）なのだろう、と思われる。

- 526　日本書紀紀年の継体20年（526）は、武烈7年なのであろう。（継体紀20年条参照）
- 527　「磐井の乱」は、二朝の戦いの一端を示しているようである。（継体紀21年8月1日条末尾参照）
- （530?）神武天皇（継体天皇重祚）、日辺日本国（近畿）の橿原宮で即位か。
- 530　欽明天皇即位。（帝説）
- 531（辛亥の年）「辛亥の年（531）に『日本』の天皇及び太子・皇子がともに死んだ」という奇怪な記事を日本書紀は載せている。（継体紀25年条）
「日辺日本（近畿）の武烈天皇及び太子・皇子がともに死んだ」ということを示唆しているのであろう。
- 534　継体天皇（神武天皇）退位か。（継体紀25年条「或本云」）
- 538　欽明朝の戊午年（538）、畿内に仏教伝来か。
- （552?）継体上皇、崩御か。（82歳紀）
- 552　壬申年（552）、大倭国（九州）に仏教伝来か。
- 562　任那（日本府）、新羅に滅ぼされる。
- （欽明28?）「古の風」として続いてきた『殉死』の禁。
（垂仁紀28年条参照）

垂仁28年に始まった殉死は、仏教を敬う欽明天皇によって、禁じられたのであろう。
但し、殉死は孝徳天皇大化二年迄続く。

- 574　厩戸豊聡耳皇子（聖徳太子）誕生。
法隆寺釈迦像光背銘文の薨去の年から逆算。
（「聖徳太子」亀井勝一郎、日本ソノサービスセンター、66頁）
- 587　物部守屋を討伐。
- 592　「朕が嫌しとおもう所の人を断らむ」という崇峻天皇の詔を聞いた蘇我馬子は徒党を集めた。東漢直駒は、東（近畿地方）の孝元天皇を弑せまつったのであろう。

A3にEP印刷



- 593　推古天皇元年。厩戸皇子立太子。(紀等)
- 594　等与刀弥々大王（厩戸皇子）即位か。
  元興寺丈六光背銘に「等与刀弥々大王」としるされている。
  隋書倭国伝中の「多利思比孤」のことと思われる。
- 603　12月５日、冠位十二階を制定する。
- 604　１月１日、冠位を始めて賜う。
  (恐らくこの頃、等与刀弥々大王は、自ら王位を返上し、皇太子となられたのであろう)
- 604　４月３日、皇太子、憲法17条を作る。
  「国にふたりの君非ず。民にふたりの主無し」とある。(第十二条)
- (?)　金人の夢告。
- 613　片岡山遊行以後、聖徳太子は国史編纂事業に没頭された、と考えてみたい。
  「天皇は神の直系の子孫である。神の正統な血筋を受けていない者が、天皇に代わって日本を統治することは出来ないのだ」
  という国史が創られ、先祖の墓が九州から近畿へ移され、平城の地に都の建設がすすめられてゆくことになるのであろう、と推察される。
- (?)　先ず、上・中・下の大和三道が作られた。
- 645　蘇我氏（本宗家）滅亡。
- 645　孝徳天皇は、
  「上古の聖王（仁徳天皇）の行なわれた跡にしたがって天下を治めよう」
  と言われた。(紀)
- 645　難波長柄豊碕に遷都。(仁徳天皇も難波に都された)
- 646　大化改新の詔を発布。
- 656　「香山の西より石上山に至る渠をほる。(未だ成らざる時) 時の人は、狂心の渠といった」(紀)
  ＊石上の石や香山の西あたりの石を舟200隻で運んで、平城の湿地を埋め立てたか
- 663　白村江で、唐・新羅連合軍に大敗。
- 664　防人・烽(のろし)を置き、水城を築いた。
- 665　大野城・椽城を築いた。
- 667　(難の) 大津宮に都を遷した。
  (＊天智天皇は、近江国に引き籠ってしまうほど憂鬱だったわけではあるまい)
  内裏を持つ大宰府は、遠の朝廷と呼ばれた。
- 671　11月24日、(近江宮に相当する) 大宰府炎上か。(紀)
  (＊但し、天武朝に、規模を拡大してあわただしく再建したのであろう)
- 672　壬申乱（じんしんのらん）
  大海人皇子は天をよぎる(阿蘇の)黒雲を占い、「最後には天下を得るだろう」と言われた。
  大海人軍は大友天皇・天智上皇分断に成功。
  (＊大友天皇は自殺。天智上皇は吉野に幽閉されたか)
- 679　吉野の会盟。天智上皇の前での盟い。
- 681　天武天皇、帝紀・上古の諸事を記定させる。
- 686　天武天皇退位。吉野で国史編纂事業に没頭。
  (これ以後、持統天皇の吉野行幸の記事が頻出する)
- 694　藤原宮に遷る。
- 697　皇太子（文武天皇）に譲位する。(紀)
- 701　大宝律令の制定。
- 702　持統天皇崩御。
- 703　天武上皇崩御か。
- 707　文武天皇(曾祖父天皇ともいう)が、母元明天皇に譲位されたか。
  (＊譲位後、文武上皇は、曾祖父と呼ばれるほどの長寿を保たれたのだろう)
- 710　平城京への遷都。(邪馬台国の都に相当する壮大な都が現出)
- 712　「古事記」完成。
- 713　諸国に「風土記」の編纂を命ずる。
- 720　「日本書紀」完成。(聖徳太子が理想とされた歴史書完成)
  これ以後、真実の歴史を伝えるものは、ことごとく抹殺。人の口封じも行なわれたことであろう。
  そして、戦国時代を経て江戸時代となったとき、聖徳太子の理想はついに完結した。(真実の日本の歴史を知る者は誰もいなくなっていたのだった)

切断線

注記:

- 縦長の用紙に 横書きしている場合、インターネットの画面上では、非常に読みにくいですね。
- 画面上部の『回転マーク』を押し、時計回り方向に９０°ずつ、３度回転させると、通常の横書き文章になります。

第２表　前300年ころを中心とする朝鮮半島の歴史と日本の歴史との対比（想像）

遼寧地方	朝鮮半島		北九州・山口地方　中国・近畿地方
殷　前1100 前1100年頃、周に破れた殷民が、遼寧・扶余地方等へ移住したのであろう。	新石器時代 櫛文土器時代 前1100 前1000		縄文時代
周 ○赤褐色の無文土器 ○銅剣 ○銅矛 ○銅戈 ○銅鏡 ○銅鉇 ○甕棺墓 ○石棺墓 ○土壙墓	殷民に追われた者達が、遼寧・扶余地方等から朝鮮半島へ流入したのであろう。	○無文土器 ・黄褐色で文様は無い。 ・彩色土器も出土。 ・回転台や陶車を使用しない平底の土器。 ○本格的な農耕が始まる。 ・石庖丁が代表的。 ○低い丘陵に集落形成。 ○隅丸長方形の竪穴式住居。 ○方形周溝墓が多数発見されつつある。	縄文晩期 ・箕子とは別系統の殷民（扶余系殷民）の子孫渡来か。 ・殷滅亡の紀元前1100年以後あまり年月を経ていないある時、扶余（今の満州）あたりから、韓国南西部の扶余郡『松菊里遺跡』の地、および日本列島（北九州・中国・近畿地方など）へ渡来したものと思われる。 ●胎土に石粒を含む黒っぽい土器。 ・夜臼式土器、刻目突帯文土器、他。 ●高度な稲作技術（板付遺跡『水田』の下層調査により判明） ●石庖丁 ●甕棺墓〔九州・近畿（大阪府茨木市立文化財資料館冊子参照）の両地域に見られる〕 ●支石墓 ●環濠 ※扶余系殷民の子孫達は、前300年頃、当初の弥生人の支配下に置かれたと解される。
※遼寧地方には、箕子の子孫達が居住したと思われる。 ※赤褐色無文土器、銅剣、銅鏡、鉇等が出土する。	無文土器時代 青銅器時代 前期	【扶余郡松菊里遺跡等】 ●青銅器の鋳型が出土した。 ●ジャポニカ種の炭化米が出土。 ●環濠が見られる。 ●円形・隅丸長方形の竪穴式住居が混在する。 ※箕子の子孫達に追われた者等が、朝鮮半島から、日本列島へ大挙して移住したのであろう。 ※日本に弥生時代が始まる。	
戦国時代 前403 前300 ※箕子の子孫達が、遼寧地方から北朝鮮へ移住したと考えたい。 ・燕に奪われる。 前256周滅亡 前221秦の天下統一	青銅器時代 後期（Ⅰ期）	○銅剣・銅矛・銅戈・銅鏡・鉇などが墓内から出土。 ○鋳造製の鉄斧・鉄鎌なども出土。 ○甕棺。 ○（隅角）長方形の竪穴式住居。 ○環濠は不明。	当初の弥生人 〔遠賀川式土器〕 ・板付Ⅰ式、板付Ⅱ式等の弥生前期土器の総称。 ・北九州から中部地方へかけての広い地域に分布する茶褐色の土器。 ○弥生式土器 ・茶褐色の明るい色調。 ・縄文式土器に比べると、文様は少ない。 ・彩色されることもある。 ・陶車などを利用しない輪づみ法。平底。 ○本格的な農耕が行なわれる。 ・石庖丁が代表的。 ○低い丘などに集落を営む。 ・隅丸長方形の竪穴式住居。 ○副葬品・木棺等を伴なわない方形周溝墓が多数作られた。
秦 前206 前202	前200 前190	箕準、韓王となる。 箕準、海中の王となる。	
前漢	前180 衛氏朝鮮国時代	○銅剣、銅矛、銅戈、銅鏡、鉇等が墓内から出土。 ○小形銅鐸の鋳型が出土した。 ○赤褐色の無文土器。 ・汲田（くんでん）式土器 ・須玖（すぐ）式土器 ○絹織物。（前97年崇神天皇即位） ○隅角長方形の竪穴式住居。 ・ベッド状遺構を伴う。 ○墓制 ・甕棺墓 ・石棺墓 ・土壙墓 ・支石墓 身分の差による違いかどうか、不明。 ＊墓内に青銅器等を埋納。 ○版築の技術が見られる。 ○環濠がめぐらされる場合もある。 ※夜臼（ゆうす）式土器の上に茶褐色の土器（弥生時代当初の土器）があり、その上に赤褐色の土器（須玖式土器を代表とするもの）がある。（「季刊考古学」第19号、1987年５月１日発行、雄山閣、24頁。他参照） ※箕子達の100余国内の極南界から倭奴国台頭。	箕子の子孫達が、北九州・山口地方に100余国を置いて統治したのであろう。 唐古・池上曽根 【扶余系殷民の子孫達】 ●青銅器 ●環濠集落が各地に営なまれた。 ●円形および隅丸長方形の竪穴式住居。（混在している場合が多い。） ●隅丸長方形の竪穴式住居には、ベッド状遺構が見られる。 ●やがて副葬品や木棺等を伴なう方形周溝墓が出現する。 ＊方形周溝墓の採用を強制されたのだろう。 銅鐸文化圏 ※大型の銅鐸が作られるようになる。
前漢時代	前108 前100		
青銅器時代後期（Ⅱ期） ○青銅器 銅剣・銅矛・銅戈・小形銅鐸（馬鐸）等か土壙墓に埋納されている。 初期鉄器時代 ○鍛造製の鉄利器も墓内に埋納されている。 ＊北朝鮮に留まった箕子一族の者達の習俗だったのであろう	原三国時代 0 8		銅剣・銅矛文化圏
新 8 23 25			
後漢			

＊次第に明るい色の土器へ変わってゆく。

＊唐古・池上曽根等には、扶余系殷民の子孫達が住んでいたと思われる。

〔注〕●印は、「扶余系殷民の子孫達の遺物・遺構」と解釈してみたい。

(第4巻) 7 P

6

・右頁に掲載下さい
『新やまと物語』
第三巻 第3表から
転写して下さい。

第３表　弥生時代を中心とする時代区分

時代	区分	西暦	出来事	統治者 九州	統治者 中国	統治者 近畿
縄文時代	晩期			縄文人		
弥生時代	前期	前300		当初の弥生人渡来		
		前200	・前190頃、箕子朝鮮国奪われる。箕子は、南韓の王となる。 ・前180頃、箕子は、北九州・山口地方を領有し、「海中の王」となったか。（「三国志」韓伝）	【箕子達による百余国の時代】		
			（7～80年）			
		前100	・前104頃、倭人東遷開始か。 ・前97、崇神天皇即位（紀）			
	中期	B.C. A.D.		倭奴国（極南界）		
	(イ)					
	後期		・57、極南界の倭の奴国、後漢へ朝貢。			
		100	・107、倭の奴国、再び後漢へ朝貢。			
			・147 ・188 倭国大乱	かめかんすりたい 奴稲京退（小銅鐸廃絶）		
		200		【倭人による30余国の時代】		
			・239、卑彌呼、魏国へ朝貢。 ・248（?）卑彌呼死。径百余歩の塚が作られた。		男王素（素戔嗚）を追放。素、母の根国を建国。（近畿に古墳出現）	
		300			当初の出雲国「母国」（ものくに）	
古墳時代			（銅剣・銅矛文化圏が、銅鐸文化圏を併合）	（銅鐸廃絶）（倭人による統一）		
		400			出雲国の国譲り〔現在の出雲国へ国替え〕（銅鐸廃絶）	

(イ)人、(ロ)の位置を、同じにして下さい。

(破線)
赤い点線を引くこと!

(ロ)

＊近畿地方の高度な文化は、弥生時代末に突然衰退する。＊その後、高地性集落が急激にふえる。

追加の文字は赤色。字の大きさは、他と同じ。

アミ点が消えないよう注意

〔注〕当表の『時代』および『区分』は、佐賀県教育長、高島忠平氏の見解を基にしている。
（「吉野ヶ里」安本美典、毎日新聞社、156～7頁参照）

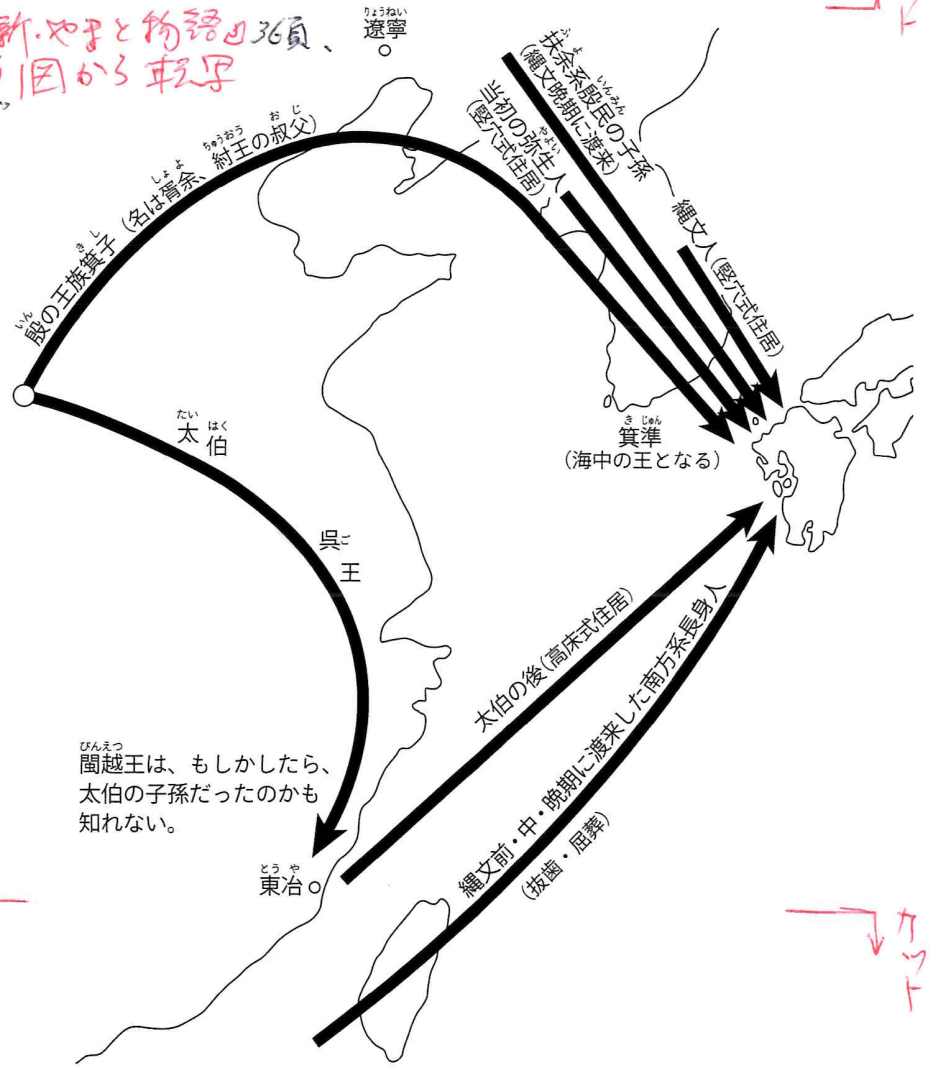
・つまり、近畿地方の高度な文化と、次の古墳時代とが、スンナリとはつながらない。

8

西2970ｲ-2/2 末

・左頁の上物に掲載下さい。カット

・『新・やまと物語』36頁、第1図から転写



第１図　六つばかりの種族（想像図）

カット

カット

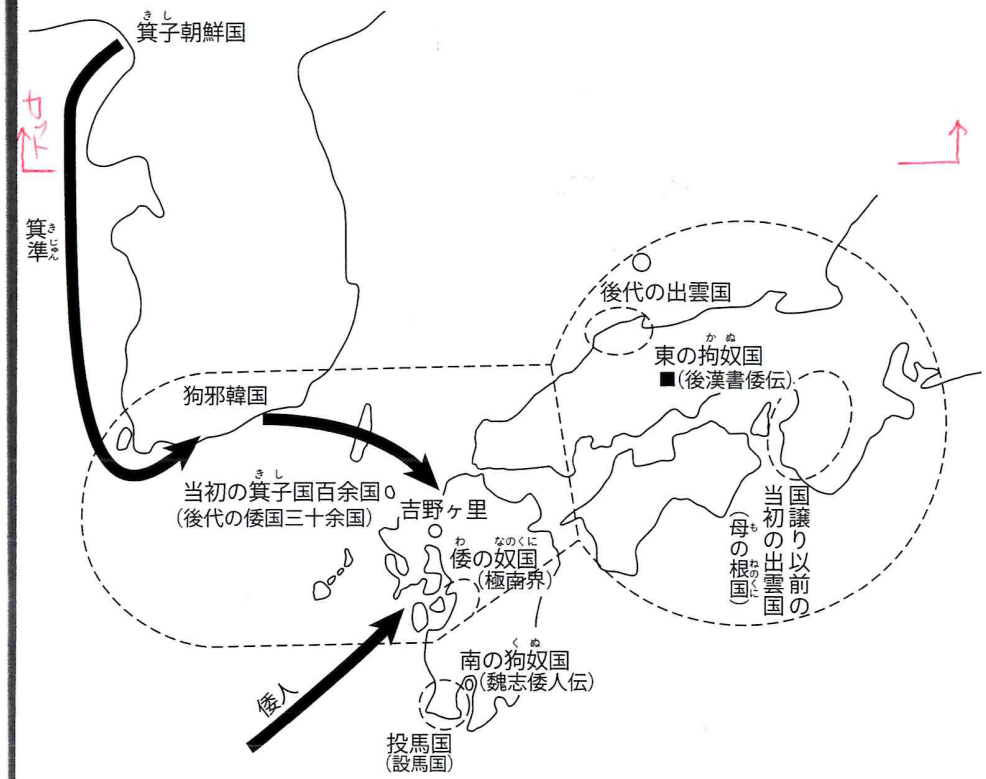
トル

第３表　弥生時代を中心とする時代区分

時代	区分	西暦	出来事	統治者 九州	統治者 中国	統治者 近畿
縄文時代	晩期			縄文人		
		前300		当初の弥生人渡来		
弥生時代	前期	前200	・前190頃、箕子朝鮮国奪われる。箕子は、南韓の王となる。 ・前180頃、箕子は、北九州・山口地方を領有し、「海中の王」となったか。（「三国志」韓伝）	【箕子達による百余国の時代】		
		前100	・前104頃、倭人東遷開始か。 ・前97、崇神天皇即位（紀）			
	中期	B.C. A.D.		倭奴国（極南界）		
	後期		・57、極南界の倭の奴国、後漢へ朝貢。			
		100	・107、倭の奴国、再び後漢へ朝貢。			
			・147 ・188 倭国大乱	（小銅鐸廃絶）		
		200	・239、卑彌呼、魏国へ朝貢。 ・248(?)卑彌呼死。径百余歩の塚が作られた。	【倭人による30余国の時代】		
古墳時代		300	（銅剣・銅矛文化圏が、銅鐸文化圏を併合）	（銅鐸廃絶） （倭人による統一）	男王素（素戔嗚）を追放。素、母の根国を建国。（近畿に古墳出現） 当初の出雲国「母国」（ものくに）	
		400			出雲国の国譲り〔現在の出雲国へ国替え〕（銅鐸廃絶）	

〔注〕当表の『時代』および『区分』は、佐賀県教育長、高島忠平氏の見解を基にしている。
（「吉野ヶ里」安本美典、毎日新聞社、156～7頁参照）

左頁の下半分に掲載
・『新・やまと物語』第2図から転写。
(37頁)



第２図　東西二つの文化圏の対立（想像図）

『新やまと物語』第1巻 39頁から転写して下さい。

右頁全面に掲載

巻頭の第4表 ⊕1014P 2行

第4表　周の時代区分

殷

前1100

○前1100年頃　周の武王、殷の紂王を滅ぼし、鎬京に都を置く。

○　〃　第2代成王　郟鄏に都を置く。しかし又、鎬京へ都を遷す。

（春秋左氏伝、宣公3年条参照）

※　郟鄏は、洛陽西方の澗水の東にのこる巨大遺跡のことであろう。

※　成王の時、周公旦は現在の洛陽の地に『洛邑城』『成周城』を築いた。

※　鎬京が首都とされ、洛邑・成周は副都とされた。

前1000

西周時代

前 900

前 800

前770年 ⊕1042P-1/3 19行 ⊕1109P

○前770年　第13代平王、鎬京を秦に与え、郟鄏へ都を遷す。

（春秋左氏伝、昭公26年10月条。他参照）

※　洛陽西方の澗水の東の巨大遺跡を調査した結果、

①　殷代の層

②　西周時代の層

③　東周時代の大量の遺物を包含する層

④　戦国時代における補修部分

が確認されたという。（「中国の帝都」村田治郎、綜芸社、18～20頁参照）

前 700

周

春秋時代

前 600

東周時代

○前516年　第26代敬王4年、成周へ都を遷す。（春秋左氏伝、昭公26年条参照）

前 500

○前510年　敬王10年、成周の城壁を修復。（春秋左氏伝、昭公32年条参照）

○前509年　敬王11年、前年に引き続いて、天子の居城である洛邑城（宮城）を成周城内へ拡張する工事も行なったのであろう。（春秋左氏伝、定公元年条参照）

前 400

○前403年（前453年）戦国時代始まる。

戦国時代

前 300

○前256年　第37代赧王、成周から元の郟鄏の王城へ遷って西方の秦と戦い、ついに滅ぼされたと解される。（史記、周本紀参照）

前 200

秦・前漢

○前221年　秦の天下統一。

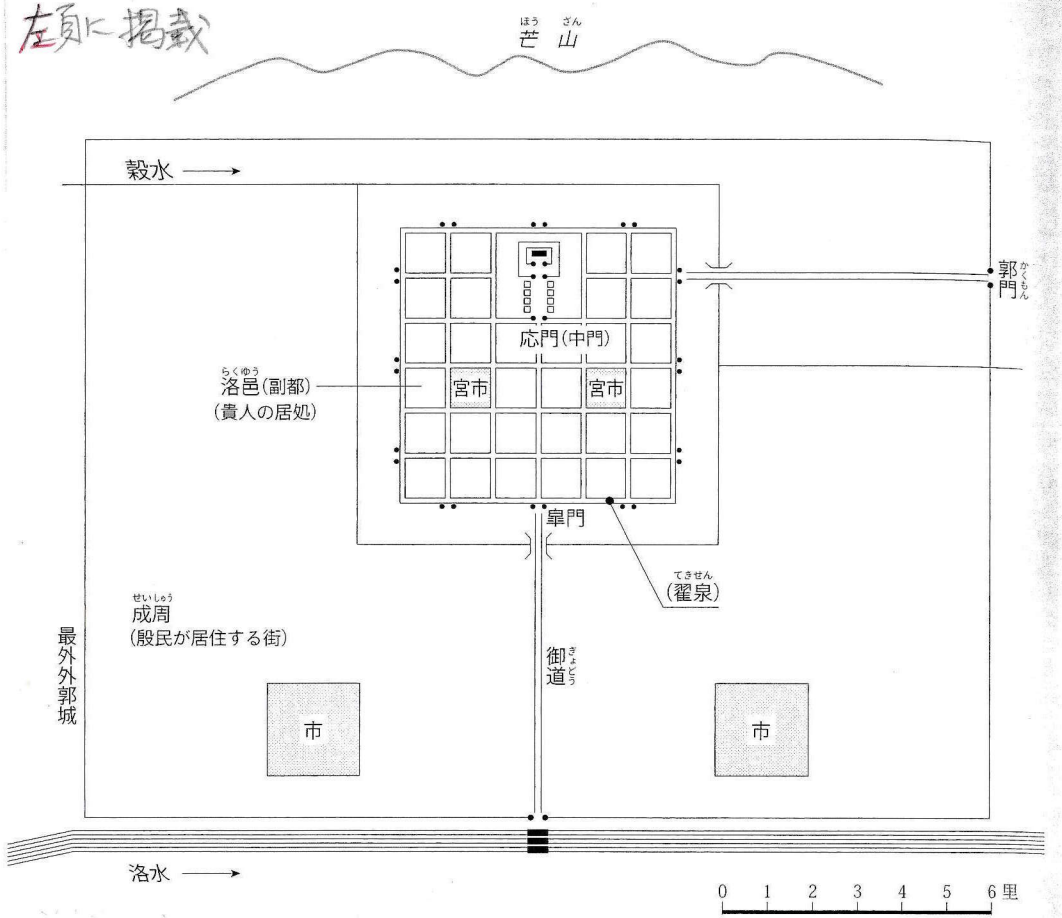
○前206年　秦滅亡。

○前202年　前漢興る。

〔注〕『史記』の著者司馬遷が「郟鄏の王城」と「洛邑・成周の王城」を混同したから、現在混乱状態にあるのだろう、と推察される。（第4巻）11

「新や」(1)－83頁

左頁に掲載



【6・6城】

第6図　周公旦が築いた副都『洛邑』『成周』の想像図

〔注〕①現在、「周公旦は、『洛邑』と『成周』の2座を別々にほぼ近接させて配置した」と解されている。しかし「支配者と被支配者とは平等である」といわんばかりの配置にした筈はあるまい、と思われる。
「支配者達の居処である『洛邑城』を周り成す『成周城』を築いて、この『成周城』内に、被支配者である殷民達を住まわせたのだろう」と考えてみたい。

㊐1040 − 3/2

②周礼に「閽者（門番・宦官）は、『中門』（皇居の外から内に順に設けられた五門のうち真中の第三門）を警備し、云々」とある。（「漢・魏・六朝・唐・宋散文選」平凡社、197頁参照）

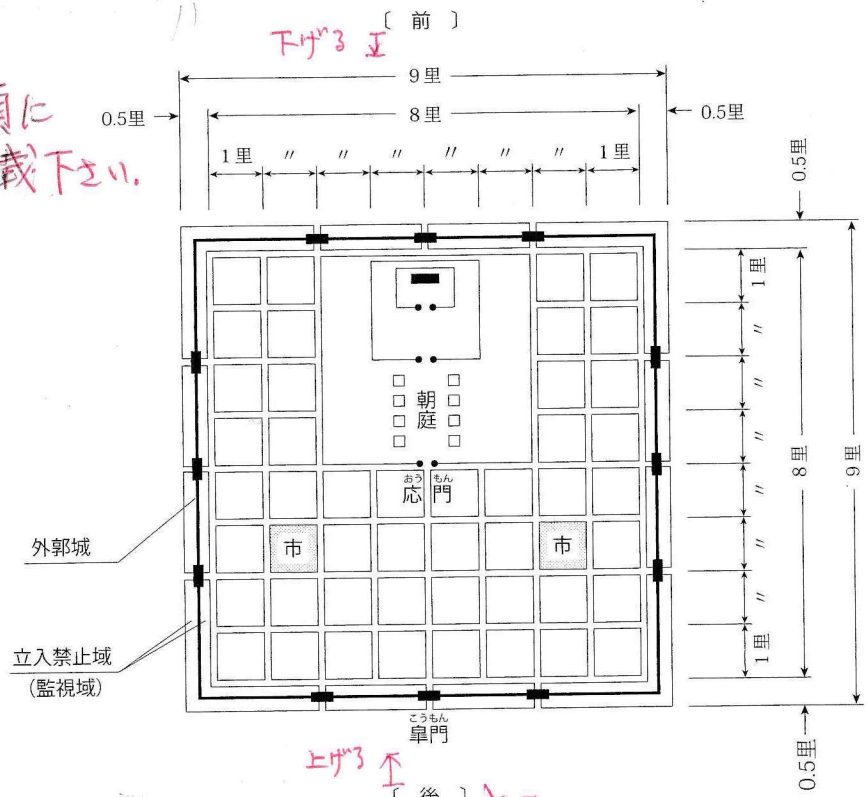
③昔、宮中に設けた市場を『宮市』と称した、という。（「漢和辞典」小林信明、小学館〈宮市〉参照）

④この【6・6城】が、後代の【9・6城】や【9・7城】と変貌を遂げてゆく発端になったのだろう。

(48)

下げる

右頁に掲載下さい。



上げる

【8・8城】

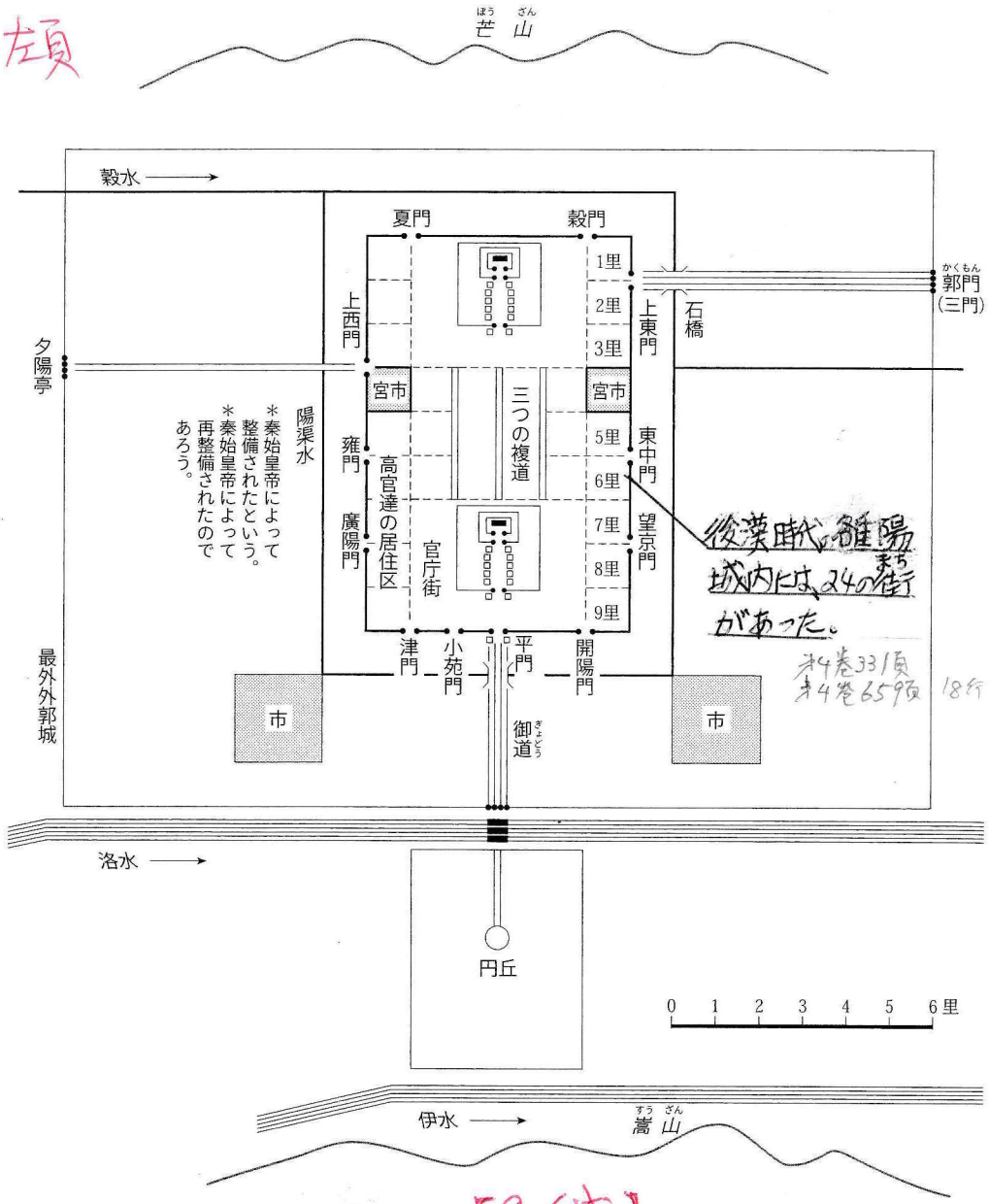
第5図　「詩経」「周礼」の理想都市（周の首都『鎬京』の想像図）
（※市があり、東西南北の各面に3門づつ、合計12の城門がある。）

〔注1〕①『詩経』に、「城内の中央に王宮を建て、その東と西に民の住居を連ねさせ、宮室の正門には応門を立て、都城を囲む城壁には皐門を立てた」などとある。
②『周礼』に、「匠人営国。方九里旁三門。国中九経九緯。経涂九軌。左祖右社面朝後市。市朝一夫」とある。

〔注2〕○正方形の九里四方の都城の各面にそれぞれ3門、合計12門があり、対面する門をつなぐ大道が縦横に配されていたのであろう。
○また、外敵が城壁を乗り越えて侵入しようとする危急の時、守備兵達がただちに駆けつけることができるように、戦略上、外郭城城壁の内側に沿って一周する大道が設けられていたことだろう。（第27図参照）
○さらに、上記の各大道間にそれぞれ1本づつの大道が配置され、全体では、東西方向に9本、南北方向に9本の大道があって、整然とした街並みが形成されていたように解される。
○周の首都『鎬京』は、いわゆる「前朝後市・左祖右社・中央宮闕・左右民廛（すまい）の原則」と称される構想の理想都市とされたのではなかろうか。

〔注3〕○第27図「唐の長安城」との類似点が多い。

「新や」(1)−84頁



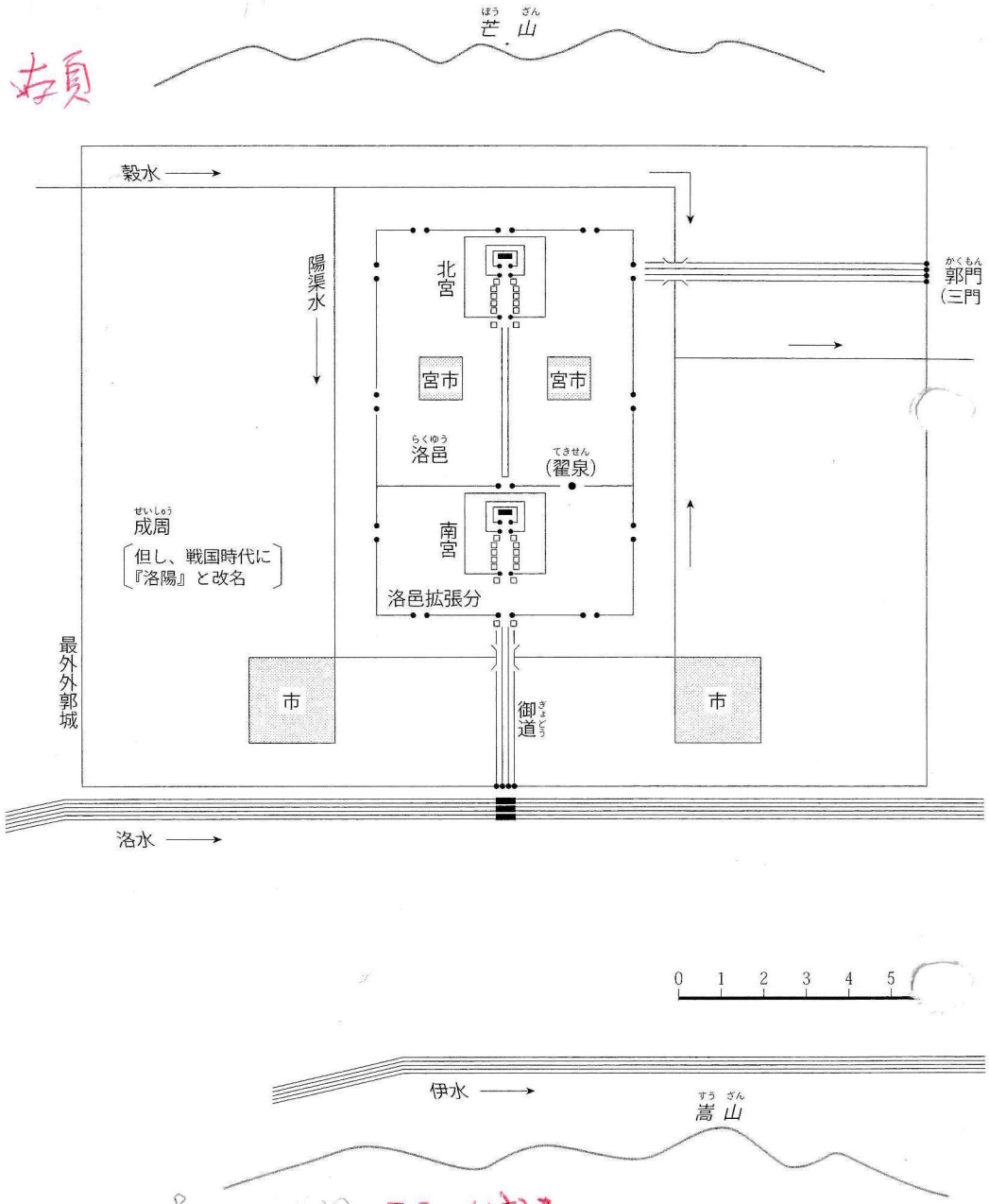
後漢時代、雒陽城内には、24の街があった。

第4巻331頁
第4巻659頁 18行

【9・6城】

第8図　後漢雒陽城想像図

〔注〕①「平門」が正門であった。
②「小苑門」（苑門ともいう）は、基壇の無い少々小さな門とされ、馬車の通用門として用いられたのではなかろうか。

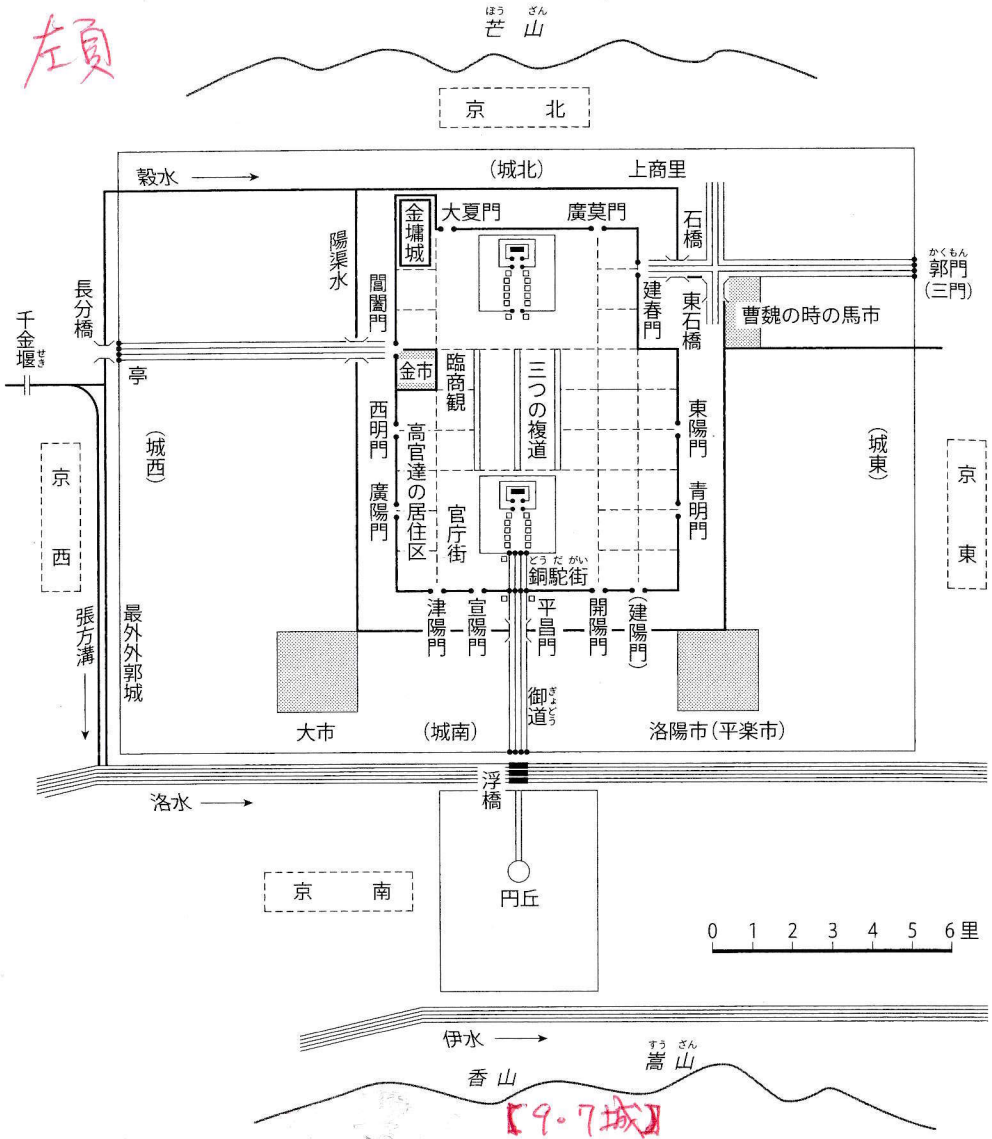


【9・6城】

第7図　周代末ころの洛陽城想像図

〔注〕九重の都：昔、中国の王城は、門を九重に造る例であったという。（「広辞苑」〈九重〉参照）

左頁



【9・7城】

第10図　西晋洛陽城想像図

〔注〕①西晋時代（265～316）に、『九六城』の東南部が拡張された。これ以降、洛陽宮城は『九七城』と称される。

②『晋書』巻四、恵帝本紀、永興元年（304）6月条に、「新作三城門」とある。新たに作った三城門とは、東陽門・青明門・建陽門のことであろうか。

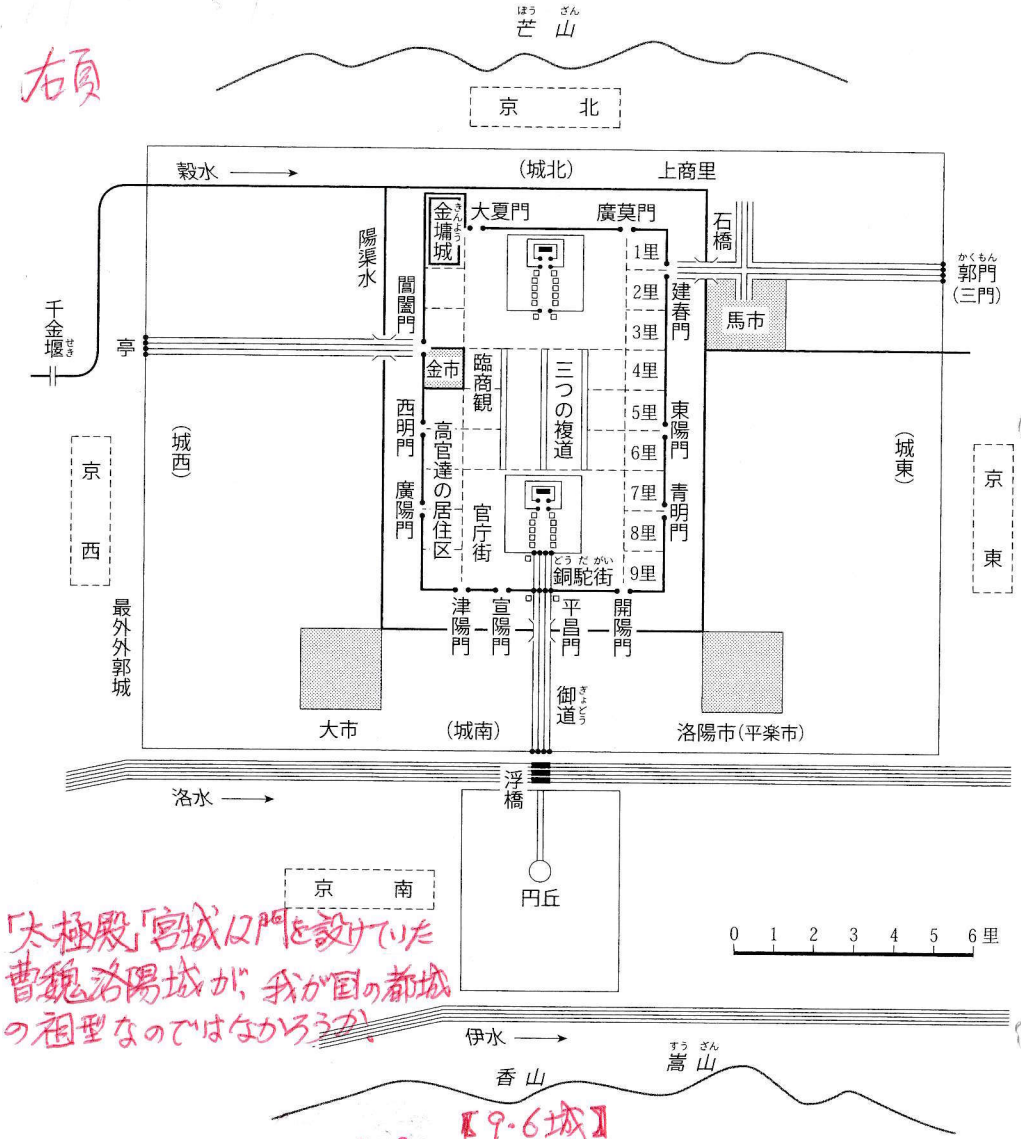
③西晋代の建陽門が北魏代の開陽門である、という。（「水経注」穀水条所載の『晋宮閣名』参照）

④『洛陽伽藍記』第四巻に、「閶闔門から城外へ出て七里のところに長分橋があった。中朝（西晋）の時、穀水の氾濫を防ぐ為、石橋を作って流れを制御し、水かさが増すと分流して洛水へ注ぐようにした」とある。

50

市場 第4巻 387頁

右頁



・「太極殿」「宮城12門」を設けていた曹魏洛陽城が、我が国の都城の祖型なのではなかろうか。

【9・6城】

第9図　曹魏洛陽城想像図

〔注〕①宮城『九六城』には「十二の宮城門」が設けられていた。

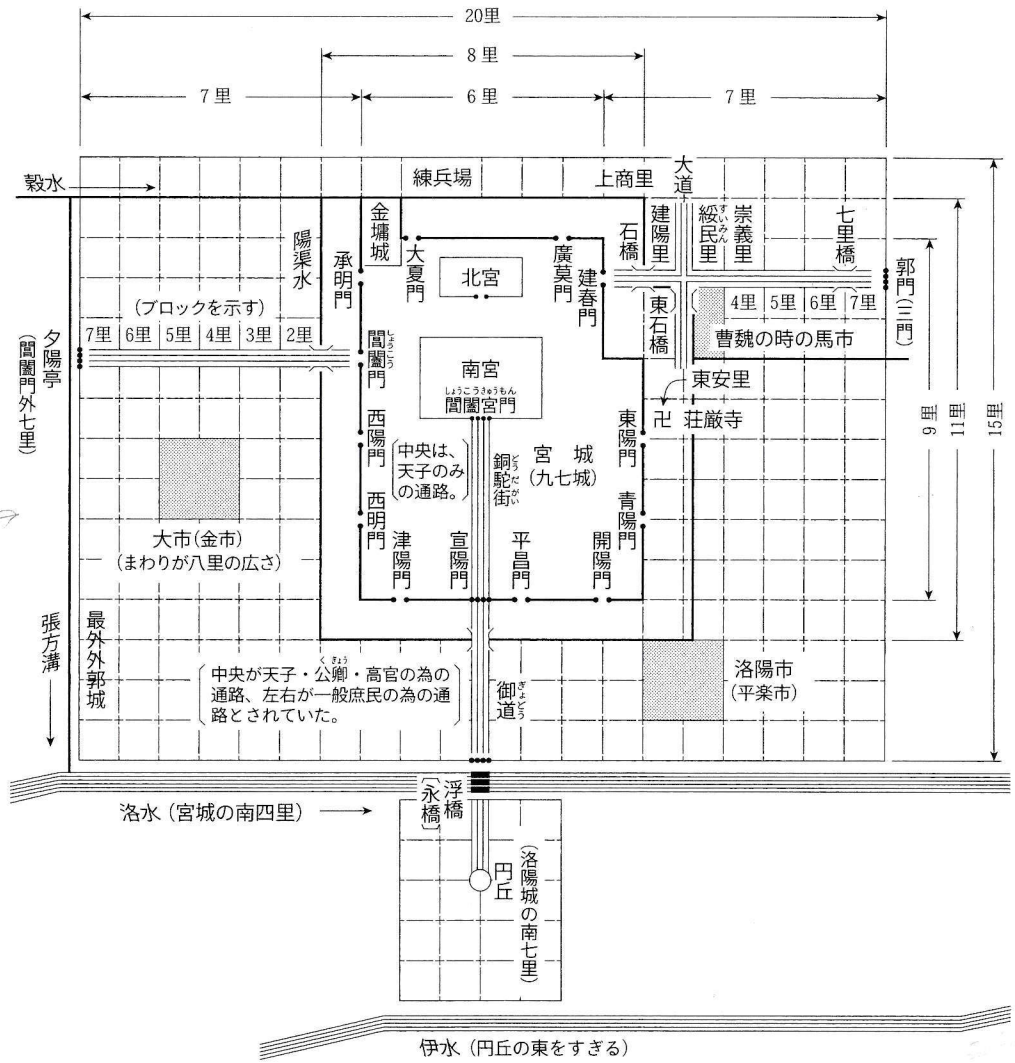
②曹魏の明帝は、後漢代の崇徳殿の故処に「太極殿」を建てた、という。

③「宮城内に高官達の邸宅が並らび、洛水の北側（宮城外）に市場を始めとする様々な施設があった」ということが、諸文献から分かる。

④最外外郭城内に一般庶民が住んだのであろう。

(第4巻) 14

・布頁全面に掲載



・大市
・金市
(注)1168-1/2

【9・7城】

第11図　北魏の洛陽区画想像図

〔注〕①曹魏・西晋代の宣陽門が、北魏代には元の平昌門の位置近傍へ移されて正門とされた、という。(「水経注」穀水条)

②宮城『九七城』には、「十三の宮城門」が設けられていた。

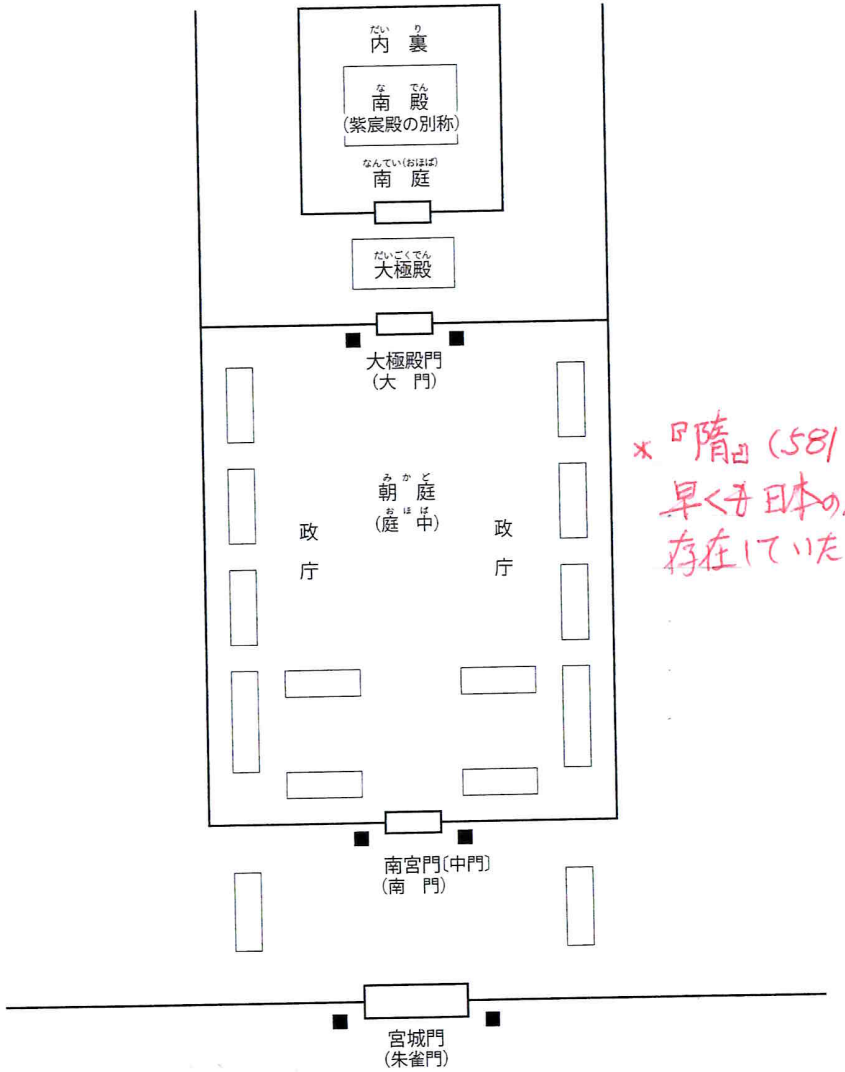
③承明門は、基壇の無い門とされ、馬車の通用門として用いられたのではなかろうか。

(第4巻) 15

第8図 後漢洛陽
新や(11-92) (注)1159-3/3末

51

・左頁全面に掲載



＊『隋』(581～619)の時代に、早くも日本の都城には、〔朝堂院〕が存在していたことを推測させる。

第14図　推古朝の小墾田宮想像図

〔注〕①推古紀16年8月条〈朝庭〉〈庭中〉〈大門〉。同18年10月条〈朝庭〉〈南門〉〈庭中〉〈廳（政庁）〉。同20年是歳条〈南庭〔紫宸殿の前庭（広辞苑「南庭」）〕〉参照。

②「長安から平城へ」江上波夫編、平凡社、15～16頁（岸俊男氏執筆部分）参照。

③往古には、「南宮」の北方に「北宮」があったのだろう、と推察される。「南殿」「南庭」「南門」は、宮城内に「南宮」「北宮」の二宮があったことを示唆しているように思われる。

④朝堂院の南正門を、「中門」とも呼称するという。（「よみがえる平城京」坪井清足監修、日本放送出版協会、86頁参照）

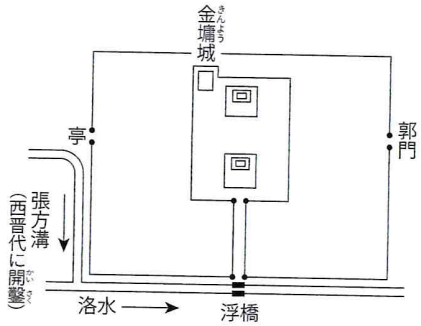
＊南北方向に並ぶ五つの正門のうち、真中に位置しているから「中門」とも呼ぶのであろう。

㊐1,128ページ　2/2 9行

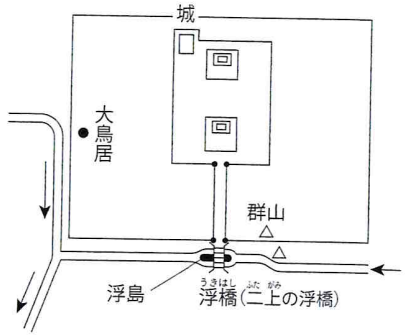
㊐1,145ページ 末 太極・昭陽殿

㊐1,317ページ 1/4

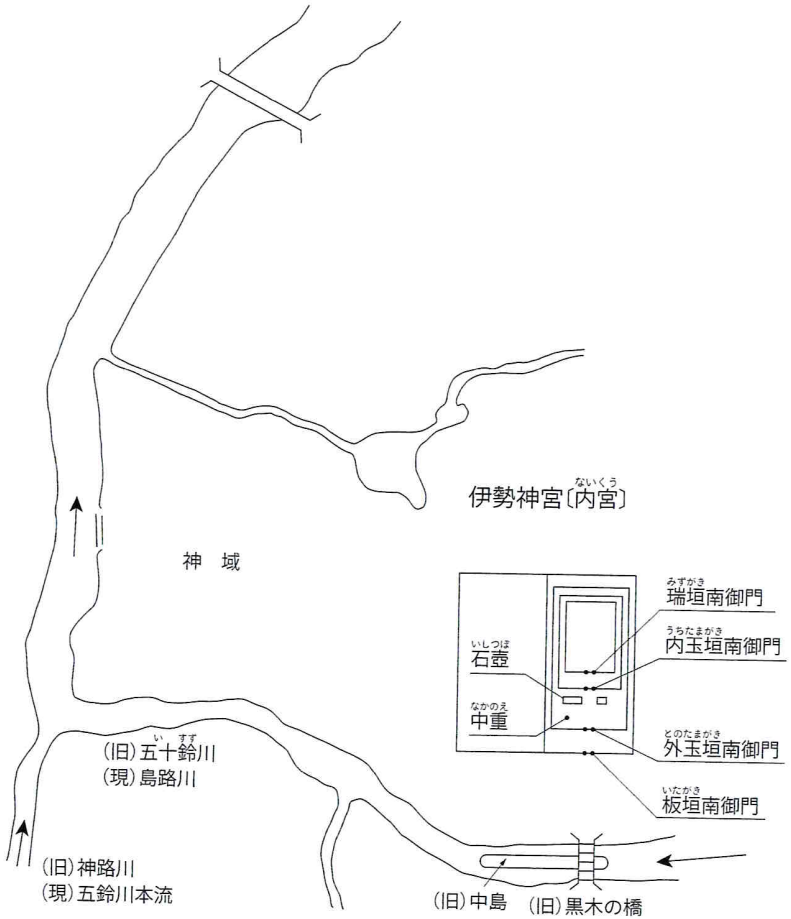
右頁全面に掲載



洛陽の都想像図



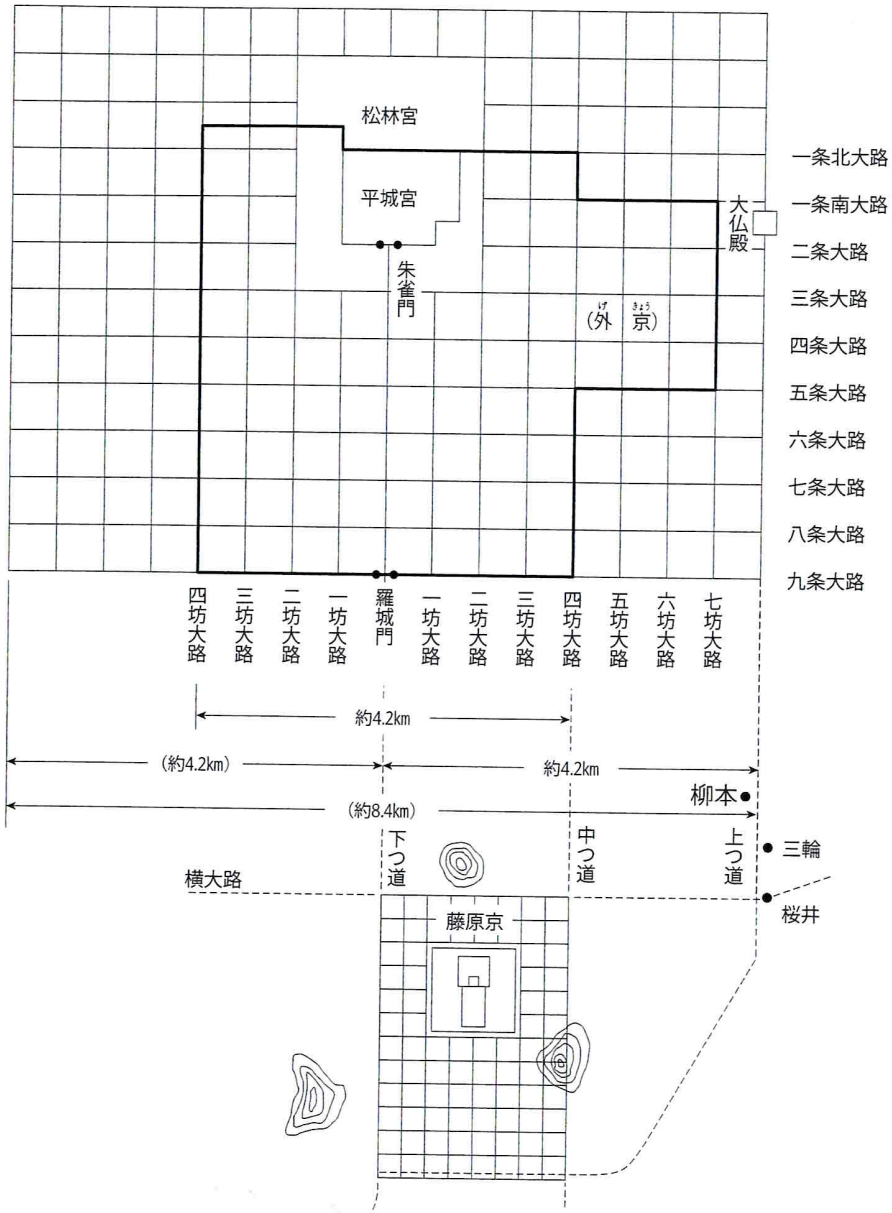
邪馬台国の都想像図



第16図　洛陽の都・邪馬台国の都・伊勢神宮の平面構想

17

左頁全面

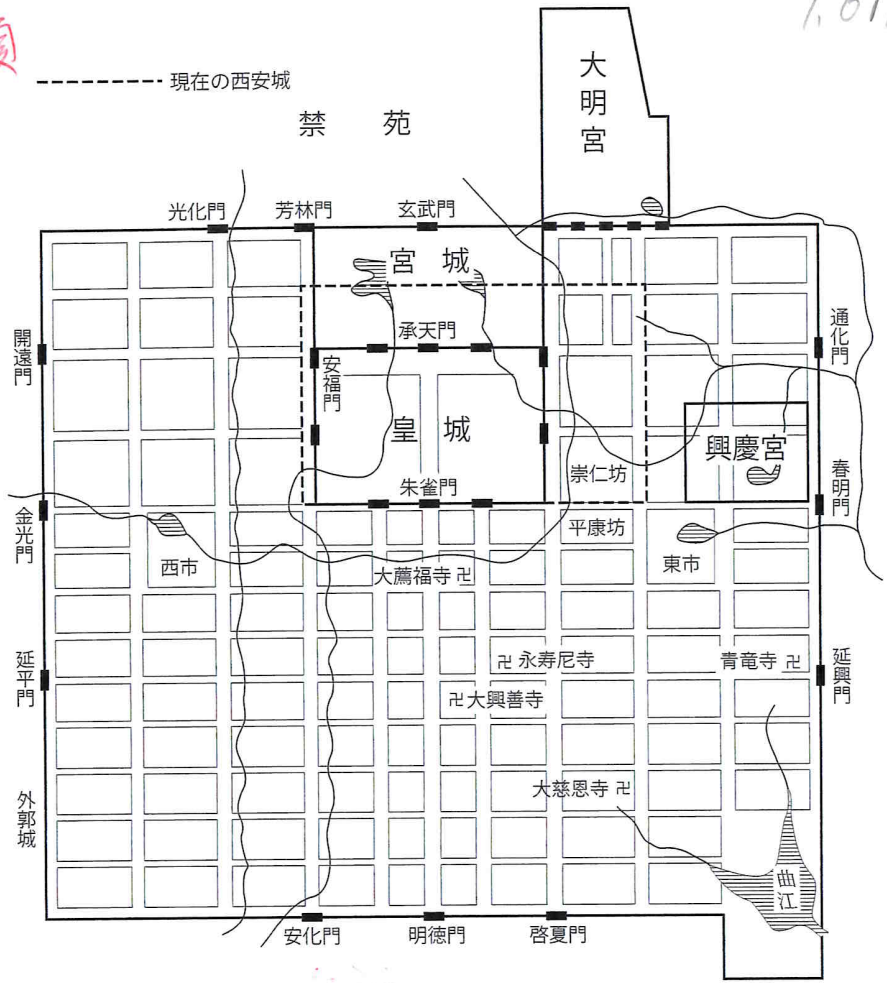


第20図　当初の平城京構想（想像図）

〔注〕①上つ道・中つ道・下つ道の三道は聖徳太子によって造られた、といわれている。（「聖徳太子」田村圓澄、中公新書、4頁参照）

②平城京は、碁盤目状の整然とした市街、および合理的な地番制を採用している。これらは、長安城よりもはるかに進んだ様式である。（「奈良の都」虎尾俊哉、講談社、88～91頁参照）

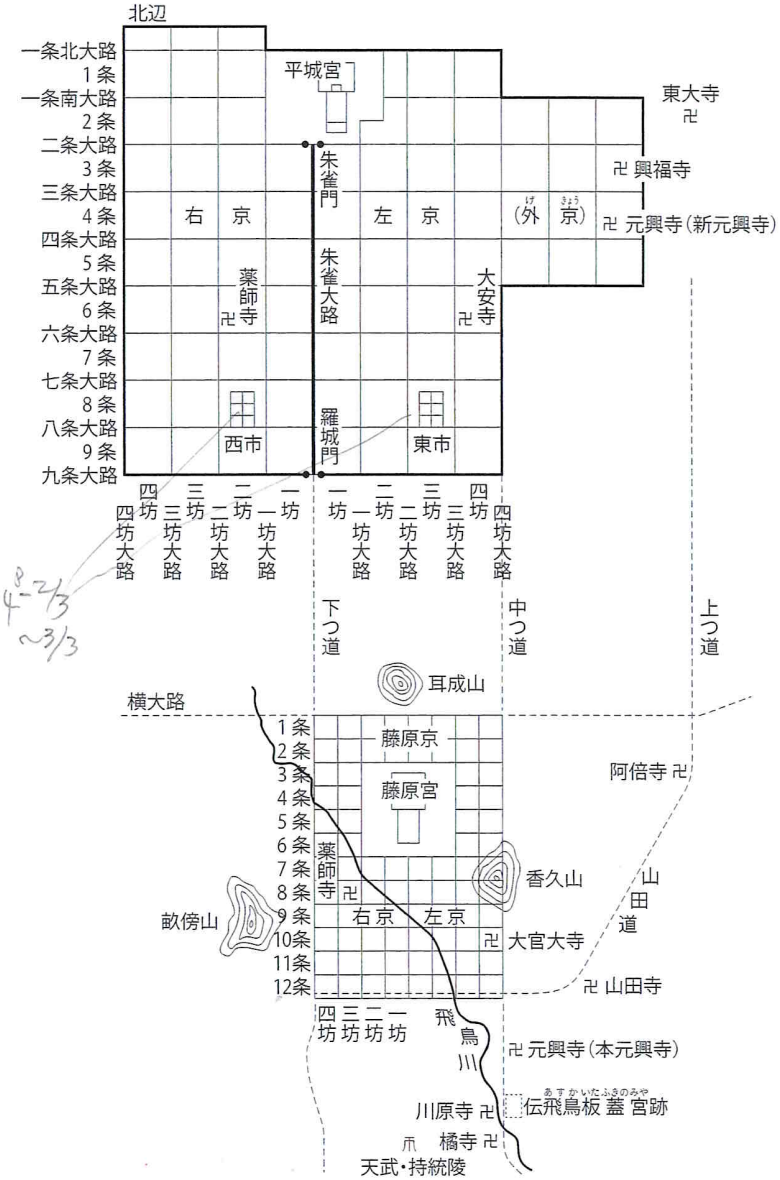
※「長安城を模倣して築かれた平城京の方が、…… 長安城よりも一層優れている」と言うに等しい現代の解釈は、誤っているように思われる。



第27図　唐の長安城

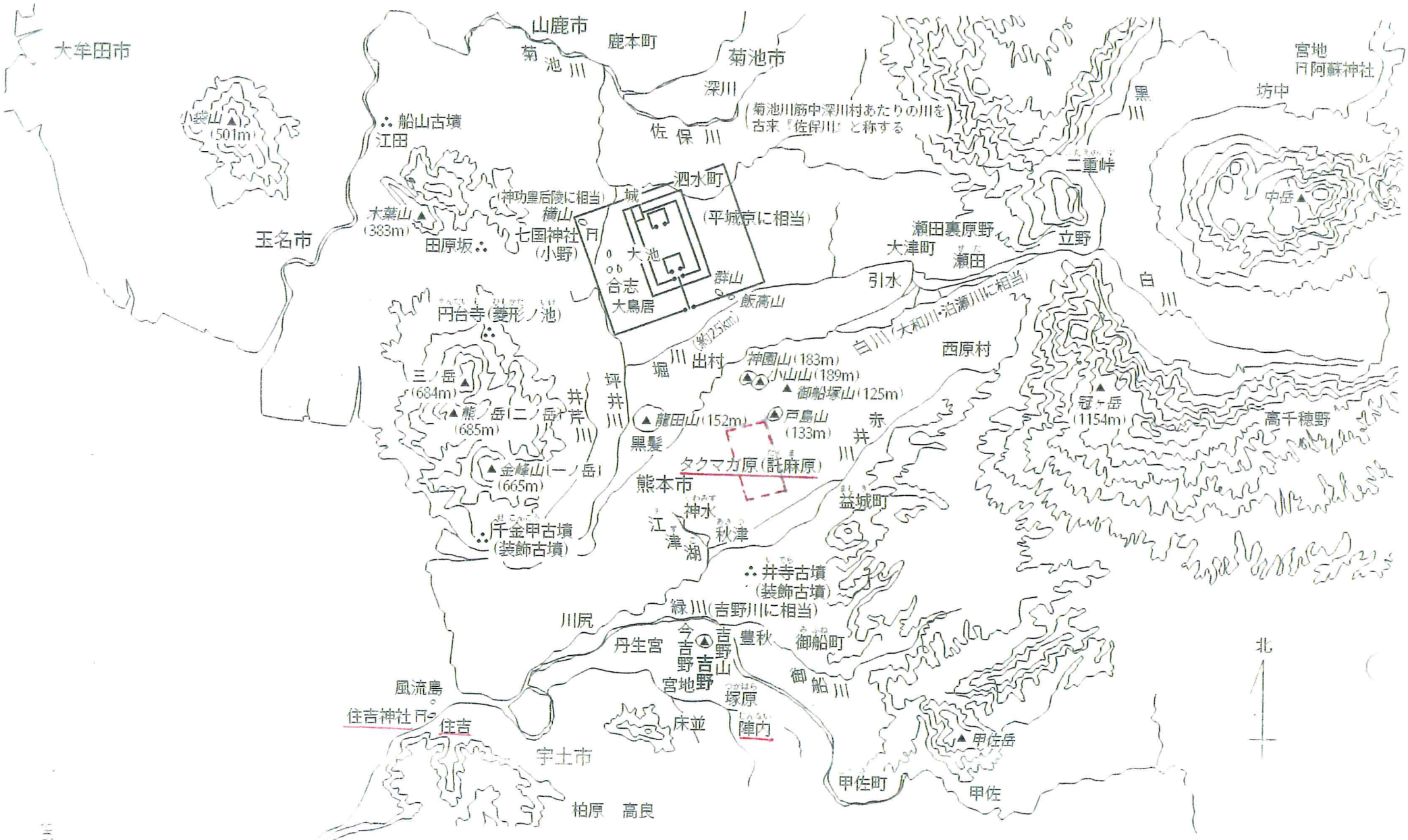
『世界の歴史』(4) 唐とインド、塚本善隆、中央公論社、375頁。
『世界大百科事典』平凡社〈長安〉。他参照。

〔注〕①外郭城城壁の内側に沿って、大道が回らされている。
②宮城の南に、東西の市が置かれている。
③外郭城の各面ごとに〔外郭城の外方へ向かって打ち開く〕3門が配置されており、全部で12門がある。
④対面する門をつなぐ大道が多数ある。
⑤第5図「詩経」「周礼」の理想都市参照。（＊かなり似ているように思われる）



第26図　藤原京・平城京比較対照図

『長安から平城へ』江上波夫、平凡社、27頁。
『奈良の都』虎尾俊哉、講談社、89頁。
『世界の歴史』(4) 唐とインド、塚本善隆、中央公論社、375頁。他参照。
＊朱雀門は、〔もと大伴門などと呼ばれていたが〕唐の長安城の皇城門『朱雀門』という名を踏襲した。（「広辞苑」〈朱雀門〉。第27図参照）



第12図　曹魏の洛陽城を模した「邪馬台国の都」想像図

〔注〕「白川中流域一帯に前方後円墳が無い」ということが注目される。

20-1/3

第13図　邪馬台国の「洛陽城」想像図

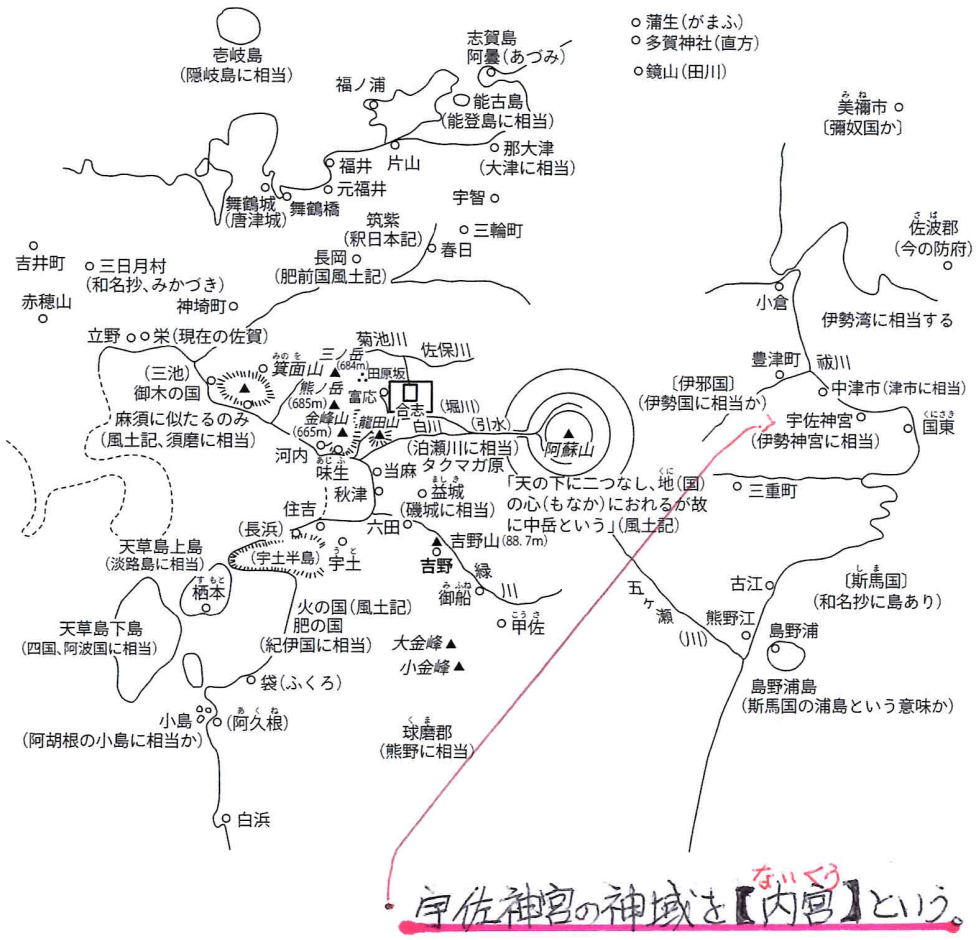
〔注〕①曹魏代の宮城（九六城）の城壁には、「十二の宮城門」が設けられていた。また、曹魏の明帝は、後漢代の崇徳殿の故処に「太極殿」を建てた、という。

②一方、『日本書紀』皇極天皇四年六月条には、「大極殿」や「十二の通門」の記載がある。

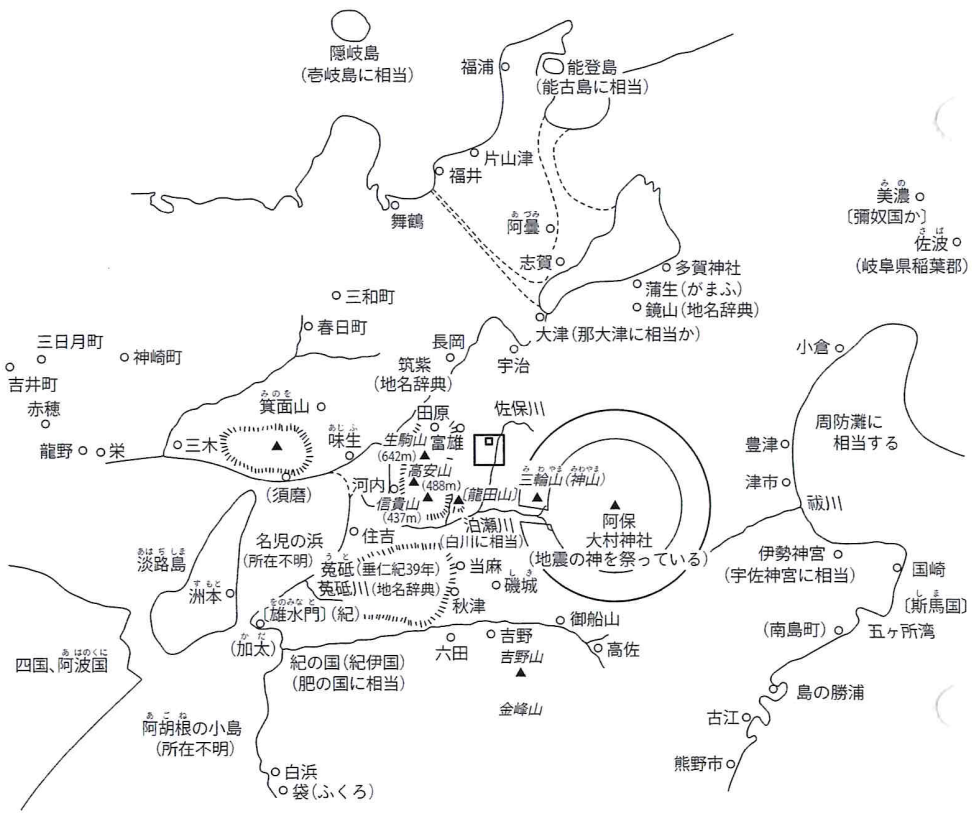
③合志原の『大池』『小池』について、「聖徳太子当国に《五ヶ所の池》を穿ち給ひし一なりといふ」と言い伝えられている。（「菊池郡誌」熊本県教育会菊池郡支会、名著出版、昭和48年1月発行、377頁〈大池小池〉参照）

※昭和42年6月30日付、国土地理院発行の5万分之1地図「高瀬」「隈府」参照。

（第4巻）20-2/3



第19図　肥後国を中心とする九州の地図



第18図　大和国を中心とする近畿の地図

20－3/3

新・やまと物語　第四巻

21

目次

①『新・やまと物語』の題目

（出版済み）

第1巻

まえがき
序　論
この物語の主張
系譜
荒筋
『日本書紀』の記載におけるかくれた約束事

第2巻

新・やまと物語

第一編　神代（先史時代～応神朝）
第　一　章　天地開闢
第　二　章　激動の黎明期
第　三　章　極東地域にみられる各種文化についての考察
第　四　章　北九州・中国・近畿地方の遺跡が語る激変の時代
第　五　章　東西二つの文化圏の対立（当初の弥生人と箕子の対立）

（以下、インターネット）

第3巻

第　六　章　太伯の後
第　七　章　倭国創建（会稽の東冶から東遷。箕子国内の極南界に倭奴国を建国）
第　八　章　垂仁天皇（五七年、極南界の倭奴国、後漢へ朝貢）
第　九　章　景行天皇（一〇七年、倭奴国、後漢へ朝貢）
第　十　章　成務天皇（倭国大乱。倭国、北九州・山口地方に三十余国を置く）

第4巻

第十一章　仲哀天皇
第十二章　神功皇后（息長足姫尊）
第十三章　三国鼎立
第十四章　洛陽の変遷の歴史
第十五章　衛氏朝鮮以後の朝鮮半島の歴史
第十六章　景初三年春
第十七章　魏国への旅立ち
第十八章　洛陽の都
第十九章　帰途
第二十章　単位
第二十一章　倭国北辺の国々
第二十二章　新王城

第5巻

第二十三章　住吉の客人
第二十四章　倭王に拝假す
第二十五章　帰国を延しての倭国での日々
第二十六章　冬至の祭（新嘗祭）
第二十七章　倭国の文化
第二十八章　邪馬台国に現出した洛陽城
第二十九章　龍神の聟
第　三十　章　相剋
第三十一章　玉匣

第6巻

第三十二章　東海の島の奇妙な習俗
第三十三章　梯儁の安否をたずねて
第三十四章　日御子の哀しみ・そして死（径百余歩の塚の内へお隠れになる）
第三十五章　悪阻の儀式（殉葬する者、奴婢百余人）
第三十六章　千餘人もの戦死者を出した内乱
第三十七章　天石窟の儀式（年齢と地位と名前を受け継いで出生する襲名の儀式）
第三十八章　女王認知の儀式（大嘗祭）
第三十九章　素戔嗚の偉業
第　四十　章　倭国の女王田心姫
第四十一章　応神天皇（上）

第7巻

第四十二章　朝鮮半島の歴史
第四十三章　応神天皇（中）
第四十四章　東の拘奴国壊滅（中国地方平定）
第四十五章　母国『出雲国』の国譲り（近畿地方を譲り受ける）
第四十六章　応神天皇（下）

第8巻

第二編　繰り返される二朝の慣例（仁徳朝～崇峻朝）
第四十七章　第二期共立時代（大雀命・宇遅能和紀郎子）
第四十八章　仁徳天皇
第四十九章　謎の世紀『五世紀』
第　五十　章　装飾古墳
第五十一章　近畿地方の古墳
第五十二章　埴輪
第五十三章　隠された二朝時代の概要（第一期二朝時代・第二期二朝時代の経緯のあらまし）
第五十四章　乎富等大公王（後の継体天皇）の出自について
第五十五章　雄略天皇（「共治国家」「共治天下」を望む遺詔）

（第4巻）23

第9巻

第五十六章　〔天上国九州の天皇〕継体天皇
第五十七章　〔日辺日本国の天皇〕清寧天皇（白髪武廣國押稚日本根子天皇）
第五十八章　飯豊天皇
第五十九章　顕宗天皇〔弘計天皇（弟）〕
第六十章　仁賢天皇〔億計天皇（兄）〕
第六十一章　武烈天皇（仁徳系の王統最後の天皇）
第六十二章　時代の圧縮
第六十三章　第一期二朝時代の終焉
第六十四章　第二期二朝時代の幕開け
第六十五章　欽明天皇（天國排開廣庭天皇）
第六十六章　敏達天皇
第六十七章　用明天皇
第六十八章　崇峻天皇（朕が嫌しとおもふ所の人を断らむ）

第10巻

第七十一章　阿蘇山
第七十二章　隋の文帝、所司をして倭国の風俗を訪わしむ
第七十三章　国に二の君非ず
第七十四章　皇太子廐戸豊聰耳皇子
第七十五章　金人の夢告
第七十六章　太子の苦悩
第七十七章　聖徳太子の薨去
第七十八章　蘇我馬子の死、そして推古天皇の崩御

第11巻

第七十九章　舒明天皇
第八十章　皇極天皇
第八十一章　孝徳天皇
第八十二章　斉明天皇
第八十三章　高市天皇（舒明天皇の重祚）
第八十四章　天智天皇
第八十五章　壬申乱
第八十六章　宗像神社
第八十七章　天武天皇（上）
第八十八章　新城（平城宮）
第八十九章　天武天皇（下）
第九十章　持統天皇

第12巻

第三編　日本の歴史改編、そしてその後〔推古朝〜現代〕
第六十九章　第三期二朝時代（天上国の推古天皇・日辺日本国の等与刀弥々大王）
第七十章　推古朝の寺院・仏像

第13巻

第九十一章　文武天皇
第九十二章　元明天皇
第九十三章　奈良時代
第九十四章　平安時代（上）
第九十五章　小野小町
第九十六章　平安時代（下）
第九十七章　南北朝時代（二朝時代）
第九十八章　戦国時代
第九十九章　近世（安土・桃山・江戸時代）
第百章　現代及び未来
あとがき

②『新・やまと物語』第四巻の目録

新・やまと物語

第一編　神代〔先史時代〜応神朝〕
第十一章　仲哀天皇……8
第十二章　神功皇后（息長足姫尊）……136
第十三章　三国鼎立……246
第十四章　洛陽の変遷の歴史……369
第十五章　衛氏朝鮮以後の朝鮮半島の歴史……369
第十六章　景初三年春……
第十七章　魏国への旅立ち……
第十八章　洛陽の都……
第十九章　帰途……
第二十章　単位……
『図・表・写真図版索引』……369

追賀資料 干支表

頭を揃える

(第4巻)24

53